自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響

長谷川　孝治（信州大学人文学部）

The Influence of Self-esteem and Reassurance Seeking on Perception of Rejection from Significant Other

Koji HASEGAWA (Faculty of Arts, Shinshu University)

要　　約

本研究では，抑うつ者における下方螺旋過程が低自尊心者についても同様に見られるかどうかを検討することである。抑うつ傾向の高い人は，対人関係の中で自己価値に対する不安を感じたとき，他者が本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを恋人や友人といった重要他者に対して繰り返し確認するという安心さがし行動をとるとされる。安心さがしの規定因に関する先行研究から考えると，同様の行動が低自尊心者についても見られると予測された。大学生に対するパネル調査の結果，低自尊心者が親密な同性の友人に対して安心さがしを行うほど，その友人から拒絶されているという認知が高まる（肯定的に評価されているという認知が低下する）ことが示された。さらに，安心さがし行動の規定因に関する検討の結果，大学生活に特有のネガティブ・ライフイベントを多く経験しているほど，安心さがしを行う意図が高まり，実際に安心さがしを行う傾向が強くなることが示された。これらの知見に関して，反映的自己評価の機能の観点から考察された。

キーワード：自尊心，安心さがし，反映的自己評価，他者からの拒絶認知

問　　題

Coyne（1976）の抑うつの対人理論によると，抑うつ傾向の高い人は，対人関係の中で自己価値に対する不安を感じたとき，他者が本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを恋人や友人といった重要他者に対して繰り返し確認するという安心さがし（reassurance seeking）行動をとるとされる。このような頻繁な安心さがしをされた恋人は，文字通り安心を返す。つまり，恋人や友人は，確かにその人のことを大切に思っているということを，抑うつ者に伝える。それに対して，抑うつ者は，一時的に安心はするものの，本当にその人が自分のことを大切に思ってくれているか，再び疑念が生じ，さらに，安心さがしをし

てしまう。それに対して，再び恋人は安心を返す。しかしながら，このようなプロセスが繰り返されると，恋人や友人は徐々に安心を返すことが面倒になり，その抑うつ者の恋人を拒絶してしまう。直接的には拒絶しなくても，無視をしたり，距離をとったりする形でノンバーバルに拒絶をしてしまうのである。このような事態に至って，抑うつ者は，「恋人はやはり自分のことを大切に思っていなかったのだ」と当初の疑念を確証することになる。抑うつ者が他者から受容されているかを確かめるために安心を過度に探すことによって，当初抱いた他者から受容されていないかもしれないという疑念を自ら確認することになってしまうのである。このように，抑うつ者が過度の安心さがしを行うことで，他者からの拒絶を引き起こし，結果として抑うつ状態が維持されてしまうというプロセスは，下方螺旋（downward spiral）過程と呼ばれる（Joiner & Metalsky, 1995 ; Katz, Beach, & Joiner, 1998）。

この抑うつの下方螺旋過程に関して，精力的に実証的な研究を行ってきたのが，Joiner らのグループである。例えば，Joiner & Metalsky（1995）は，大学生と同性のルームメイトのペアを対象とした縦断的調査によって，上述のプロセスの前半部分について実証的に検討した。その結果，抑うつ的な学生は，安心さがし行動をとることによって，ルームメイトから拒絶されることが示された。逆に，非抑うつ的な学生のとる安心さがし行動は，他者からの拒絶を引き起こさなかった。

本研究の目的は，このような抑うつ者に見られる下方螺旋過程が，自尊心の低い人にも同様に認められるかどうかを検討することである。すなわち，自尊心が低い人が安心さがしを行い，その結果他者からの拒絶を高めるかについて検討する。Joiner, Alfano, & Metalski（1992）では，抑うつが他者からの拒絶を引き起こすプロセスに対して，安心さがしと自尊心が調整効果を持つことを明らかにした。具体的には，抑うつ傾向が高く，かつ自尊心が低く，安心さがしを過度に行う男性は，抑うつ傾向が高くても自尊心が高い，あるいは安心さがしをしない人に比べて，他者からより拒絶された[1]。また，Joiner, Katz, & Lew（1999）では，安心さがしの規定因について検討し，ライフイベントを経験した人は，不安や自尊心が低下し，その結果，安心さがしを行うことが示されている。これらの知見から考えると，抑うつ者と同様に，特性自尊心が低い人にも下方螺旋過程が見られると予測される。すなわち，低自尊心者が自己価値に対する不安を抱き，それを解消するために安心さがしを行い，その結果，逆に他者からの拒絶を引き起こすという過程が見られると予測できる。

また，抑うつの下方螺旋過程に関する先行研究を概観すると，Coyne（1976）がもともと想定したプロセスと Joiner らが検証しているプロセスとは異なる点があることが分かる。それは，抑うつ者が安心さがしを行うという理論の根幹に関わる点である。Coyne（1976）の理論では，上述したように，抑うつ者が安心さがしを行うとされているが，Joiner の実証研究の多くは，抑うつ傾向と安心さがしの交互作用が他者からの拒絶に及ぼす影響を検討している（e. g., Joiner & Metalsky, 1995 ; Joiner, et al., 1992）。これら 2 つのプロセスは本来異なるものである。すなわち，抑うつが他者からの拒絶に及ぼす影響に対して，安心さがしが仲介変数として機能するか，調整変数として機能するかという違いである（Baron & Kenny, 1986）。Coyne の理論を実証するためには，抑うつ傾向の高い人が安心さがしを頻繁に行い，その結果，他者から拒絶されるという仲介過程を分析すべきはずである。しかしながら，Joiner は多くの研究において，一貫して安心さがしを調整変数として捉えた分析

を行っている（e. g., Joiner & Metalsky, 1995 ; Joiner, et al., 1992）。このような矛盾点について，Joiner, et al.（1992）では，Coyne（1976）は安心さがしが抑うつ－拒絶関係の調整変数として機能すると主張しているとし，調整変数として機能するかどうかを検討している。しかしながら，同時に，抑うつ傾向と安心さがしとの間に弱い相関がある（女性 $r=.34$, $p<.001$；男性$r=.27$, $p<.001$）という結果について，「予測と一致する」とも述べている（*pp*.168）。本来，調整変数は独立変数（あるいは説明変数）とは相関を持たないものであり，Joiner, et al.（1992）は検証しようとしている理論と分析方法が対応していないと考えられる。しかしながら，他の多くの研究において同様の観点から検討が行われ，同様の結果が見出されていることを考えると（e. g., Joiner & Metalsky, 1995 ; Joiner, et al., 1992），安心さがしは，抑うつが他者からの拒絶に及ぼすプロセスの仲介変数として機能するとともに，調整変数としても機能すると考えることもできる。実際，先行研究を見ると抑うつ傾向と安心さがしとは，弱い相関を示すことが多く（Joiner, 1994, $r=.31$, $p<.05$；Joiner, et al., 1992 $r=.34$, $p<.05$），かなり低い相関を示す場合もある（Joiner & Metalski, 1995, $r=.11$, $p<.05$；Benazon, 2000, $r=.11$ *n.s.*）。これらのことからも，抑うつ傾向が高い者は安心さがしを頻繁に行う傾向があるが，たとえ抑うつ傾向が高い者でも安心さがしをしない場合もあり，安心さがしをした場合には特に他者から拒絶されると考えることができる。また，抑うつ傾向が低い人は安心さがしをしてもしなくても，他者から拒絶されないと考えられる。本研究では，低自尊心者が採る安心さがしが他者からの拒絶に及ぼす影響について検討する。自尊心は抑うつと強い負の関連があることが多くの研究で示されている（e. g. Wood & Lockwood, 1999）。したがって，低自尊心者の下方螺旋過程でも上述した同様のプロセスが見られると予測される。具体的には，自尊心が低い者は安心さがしを頻繁に行う傾向があるが，たとえ自尊心が低い者でも安心さがしをしない場合もあり，安心さがしをした場合には特に他者から拒絶される。また，高自尊心者は安心さがしをしてもしなくても，他者から拒絶されないと予測される。

また，本研究では，Joiner, et al.（1999）と同様に，安心さがしの規定因に関する検討を行う。ライフイベントを経験することによって，自尊心が低下し，安心さがしの生起が高まるかどうかを検討する。この検討の中で，低い自尊心が，安心さがしを生起させ，それが他者からの拒絶を引き起こすという仲介過程の検証を行うことができる。

さらに，本研究では他者からの拒絶を，安心さがしを行う当人の認知として測定する。理論を正確に検証するためには，本来ならば，ペア調査を行い，他者からの実際の拒絶を測定すべきである。しかしながら，ペア調査は，分析を行えるくらいの十分な調査参加者数を確保するのが困難である等，実施が必ずしも容易ではない。したがって，本研究では，まず安心さがしを行う当人の拒絶認知を測定するパネル調査を行い，低自尊心者が安心さがしを行い，その結果，他者から拒絶され，それを認知するかどうかを検討する。具体的には，最も親しい同性の友人から肯定的に評価されているかという反映的自己評価や，その友人との関係がどの程度肯定的か，あるいは否定的かという認知を他者からの拒絶認知として測定する。このことによって，ペア調査を行うための予備的な検討を行うことができる。

方　　法

被調査者と調査の概要

調査は，心理学の授業の終わりに集合一斉法で行われ，パネル・データを採取する目的で，約2カ月の期間をあけて2回行われた。第1回調査は，2000年5月（以下，Time 1），第2回調査（以下，Time 2）は，2000年7月に実施された。両調査時点ともに，ほぼ同様の質問紙に回答を求めた。両調査に参加し，後述する反映的自己評価の対象が変わらなかった75名（男性36名，女性39名）を分析対象とした。平均年齢は18.9歳（$SD=1.16$）であった。

質問紙の構成

1）自尊心

自己全体への評価を測るRosenberg（1965）の自尊感情尺度の邦訳版（山本・松井・山成，1982）の10項目を用いた。回答は，各項目内容に対して，「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。分析には10項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど全体的な自己評価である自尊心が高いことを意味する。

2）反映的自己評価

まず，「最も親しいと思う同性の友人」を1人思い浮かべさせ，その人との親しさを「親しくない」～「非常に親しい」までの5件法で回答させた。Time 1とTime 2とも平均値は非常に高く（Time 1：$M=4.31$，$SD=0.86$；Time 2：$M=4.22$，$SD=0.67$），調査参加者はいずれも親密な同性の友人を想起していた。

次に，その人と知り合ってどのくらいの期間が経つかについて，「a．2週間以内」，「b．1ヶ月以内」，「c．3ヶ月以内」，「d．6ヶ月以内」，「e．1年以内」，「f．1年以上」の6段階のカテゴリーの中から選択させた（Time 1のみ）。「f．1年以上」と答えた人は80％であり，調査対象者の多くが長期にわたってつきあいのある友人を想起していた。

その後，想像した親しい友人像を明確にするために，その人のイニシャルを記入させた上で，自尊心尺度の各項目を，パートナーからどう思われていると予想するかを問うものにワーディングし直した項目に対して，5件法で評定させた。分析には10項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど，全体的な反映的自己評価が高く，逆にいえば，親密な友人からの拒絶認知が低いことを示す。

なお，Time 2の質問紙ではTime 1の時に想定した最も親しい友人を再び想定してもらうように記した教示文に続いて，最初にイニシャルを記入してもらった。その後，思い浮かべた友人がTime 1の調査時と同じ人かどうかについて，「a．同じ人だ」，「b．前回思い浮かべた人を忘れたので違う人だ」，「c．前回の調査には参加していない」の3つの選択肢から選んでもらった。この回答で，aと答えた人のみを分析対象とした。

3）安心さがし

Joiner & Metalsky（1995）で用いられた安心さがし尺度の項目を基にして，Coyne（1973）の抑うつの対人理論で示された安心さがし行動を考慮し，筆者と心理学を専門とする教員および大学院生が協議し，独自に作成した（10項目，5件法）。

Time 1の質問紙では，各項目の前の教示文で，反映的自己評価について評定する際，思

い浮かべてもらった最も親しい同性の友人を再び思い浮かべてもらった。そして，その人から「あなたが自分自身について抱いているイメージ」と異なる評価を受けたとすると，どのような行動や反応をすると思うかを問う形式を用いた。具体的な項目は，「自分のことを心から気づかってくれているかどうか，相手に確かめる」，「相手が自分のことを本当に理解していないと思い，相手の気持ちを聞く」等であった（Appendix 参照）。

Time 2 の質問紙では，Time 1 と同様の項目の語尾を「聞いた」，「確かめた」等，実際の行動を問う形に修正した尺度を用いた。項目前の教示文で，最近 2 ヶ月ぐらいの間に，各項目に書かれた行動や反応をすることがどのくらいあったかを，「全くなかった」～「非常によくあった」の 5 件法で評定させた。

Time 1 と 2 の両尺度において α 係数を著しく下げる 1 項目を削除し，最終的に，9 項目の合計を安心さがし尺度として用いた。得点が高いほど，Time 1 の尺度では安心さがしをしようとする意図が強いことを表し，Time 2 の尺度では安心さがしを実際に頻繁に行った（と認知していた）ことを表す。

4）対人関係の肯定性と否定性

親密な友人からの拒絶認知を測定するために，個別的な対人関係の肯定性（サポート）と否定性（葛藤）を測定する，Pierce, Sarason, & Sarason (1991) の QRI (Quality of Relationships Inventory) の邦訳版（浦・高野，1995）を12項目に短縮したものを用いた。具体的には，反映的自己評価の尺度で想定した親しい同性の友人を再度思い浮かべてもらい，その友人との関係性について示された各項目について，「あてはまらない」～「あてはまる」の 5 件法で回答を求めた。Time 1 と 2 の尺度について，それぞれ因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ，いずれも対人関係の肯定性（6 項目）と否定性（6 項目）が抽出された。分析には各因子を構成する項目の合計得点を用いた。対人関係の肯定性得点が高いほど，被調査者が親密な友人から受容されていると認知していることを表し，否定性得点が高いほど，親密な友人から拒絶されていると認知していることを表す。

5）抑うつ傾向

鈴木・青木・柳井（1989）によって開発された東大式自記健康調査票の抑うつ性尺度（10 項目）を 5 件法に修正したものを用いた。分析には項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど，抑うつ傾向が高いことを示す。

6）充実感

大野（1984）の充実感尺度を用いた（10件法，5 件法）。分析には項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど，充実感が高いことを示す。

7）ネガティブ・ライフイベント（Time 1 のみ）

大学生が経験するネガティブ・ライフイベントを測定するために，尾関（1990）および坂野・嶋田・久保・深代（1994）を参考に，20項目の尺度を作成した。各項目に示された出来事を最近 3 ヶ月間にどのくらいの頻度で経験したかについて，「全くなかった」～「非常によくあった」までの 5 件法で評定させた。各項目の記述統計量を算出し，極端な床効果や天井効果を示した 6 項目を削除し，14項目の合計をネガティブ・ライフイベント得点とした。この得点が高いほど，被調査者がネガティブ・ライフイベントを頻繁に経験したことを示す。

さらに，これら14項目に対して，因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったとこ

ろ，大学生活に特有の因子9項目（「自分の能力・適性について考えるようになった」，「自分の勉強がうまくいかない」，「友人の悩みやトラブルに関わった」等）と孤立因子5項目（「一緒に楽しめる友人が減った」，「仲間の話題について行けなかった」，「一人で過ごす時間が増えた」等）が抽出された。分析には，各因子を構成する項目の合計得点を用いた。なお，孤立因子については，固有値が負に負荷した2項目（「生活が不規則になった」，「自分の経済状態（生活費，交通費など）が悪くなった」）を逆転したものを合計得点の算出に用いた。各合計得点が高いほど，大学生活特有のネガティブ・ライフイベントを多く経験し，あるいは孤立を経験することを表す。

ネガティブ・ライフイベント尺度以外の項目は，Time 1 と Time 2 の両時点で測定された。

結果と考察

各尺度の記述統計量と単純相関

Table 1 に，本研究で用いた尺度の記述統計量と信頼性を示した。Time 2 の安心さがし（実行）の平均値がかなり低い値を示しており，被調査者が親密な同性の友人との間で安心さがしをそれほど頻繁に行わなかったことが示唆された。尺度の信頼性については，ネガティブ・ライフイベントの孤立因子がやや低いが，その他の尺度は概ね高い信頼性を示した。

Table 1　尺度の信頼性と記述統計量

	Mean	*SD*	α	*n*
Time 1				
ネガティブライフイベント（合計）	38.76	7.03	0.68	75
ネガティブライフイベント（大学生活因子）	24.73	5.82	0.74	75
ネガティブライフイベント（孤立）	13.09	3.40	0.52	75
自尊心	33.21	7.15	0.84	75
反映的自己評価	38.12	4.91	0.78	74
安心さがし（意図）	21.12	6.16	0.80	74
対人関係の肯定性	18.47	3.34	0.78	75
対人関係の否定性	9.80	2.78	0.78	75
充実感	35.23	6.91	0.87	75
抑うつ	23.21	7.71	0.88	75
Time 2				
自尊心	32.44	7.02	0.85	75
反映的自己評価	38.08	4.43	0.75	75
安心さがし（行動）	12.23	4.41	0.88	75
対人関係の肯定性	18.15	2.90	0.66	75
対人関係の否定性	10.24	2.49	0.70	74
充実感	32.89	7.97	0.89	72
抑うつ	24.61	7.81	0.88	72

Table 2に，本研究で用いた尺度間の単純相関を示した。これを見ると，Coyne（1976）の抑うつの対人理論と一致して，Time 1の抑うつと安心さがし（意図）との間には有意な正の相関が見られたことが分かる。抑うつ傾向が高い人ほど安心さがしを行おうとする意識が強いことが示唆される。しかしながら，Time 2の抑うつと安心さがし（実行）との間には有意な関連が見られなかった。抑うつ傾向が高くても，実際に安心さがしを行うことはないことが示唆された。この結果は，安心さがし（実行）の平均値がかなり低く，全体的に安心さがしが行われなかったために生じた可能性もある。

Time 1の自尊心と安心さがしとの間にも有意な負の関連が見られた。自尊心が低い人ほど，安心さがしを行おうという意識を持っていることが示唆された。また，抑うつの場合と同様に，Time 2の自尊心と安心さがし（実行）との間の関連も見られなかった。

Time 1の安心さがし（意図）とTime 2の安心さがし（実行）との間には，有意な正の相関が見られた。安心さがしを行うと認知する人は，実際に安心さがしを行うことが示唆された。

自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知および適応に及ぼす影響

低自尊心者と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響について検討するために，階層的重回帰分析による検討を行った。Time 1の自尊心と安心さがしを標準化し，それらを掛け合わせて交互作用項を算出した。他者からの拒絶認知の指標である，Time 2の反映的自己評価を基準変数として，次の順序で説明変数を回帰式に投入した。Step 1にTime 1の

Table 2　諸変数間の相関

	Time 1										Time 2					
	NLE	NLE-U	NLE-I	G	RG	RS	QP	QN	JU	DP	G2	RG2	RS2	QP2	QN2	JU2
Time 1																
NLE-U	0.91**	-														
NLE-I	0.12	0.00	-													
G	-0.53**	-0.46**	-0.30**	-												
RG	-0.26*	-0.21†	-0.25*	0.64**	-											
RS	0.38**	0.39**	-0.13	-0.29*	-0.12	-										
QP	-0.03	0.06	-0.02	0.12	0.33**	0.07	-									
QN	0.14	0.13	-0.12	-0.05	-0.24*	0.13	-0.34**	-								
JU	-0.31**	-0.25*	-0.45**	0.40**	0.48**	-0.09	0.28*	-0.26*	-							
DP	0.51**	0.48**	0.27*	-0.65**	-0.50**	0.39**	-0.19	0.19	-0.63**	-						
Time 2																
G2	-0.38**	-0.39**	-0.31**	0.79**	0.47**	-0.13	-0.01	0.00	0.35**	-0.45**	-					
RG2	-0.15	-0.13	-0.20†	0.54**	0.58**	-0.17	0.13	-0.10	0.31**	-0.25*	0.67**	-				
RS2	0.30**	0.37**	0.01	-0.10	-0.20†	0.38**	0.14	0.14	-0.16	0.36**	-0.10	-0.13	-			
QP2	-0.03	0.05	-0.18	0.18	0.44**	0.04	0.79**	-0.28*	0.37**	-0.16	0.19	0.39**	0.11	-		
QN2	0.24*	0.18	-0.07	-0.08	-0.22†	0.22†	-0.27*	0.75**	-0.24*	0.11	-0.08	-0.23*	0.24*	-0.33**	-	
JU2	-0.20	-0.25*	-0.22†	0.48**	0.39**	-0.24*	0.10	-0.06	0.52**	-0.47**	0.57**	0.48**	-0.08	0.28*	-0.13	-
DP2	0.25*	0.33**	0.26*	-0.58**	-0.46**	0.14	-0.16	0.06	-0.49**	0.69**	-0.67**	-0.40**	0.19	-0.25*	0.07	-0.69**

Note. NLE＝ネガティブライフイベント（合計），NLE-U＝ネガティブライフイベント（大学生活），NLE-U＝ネガティブライフイベント（孤立），G＝自尊心，RS＝安心さがし，QP＝対人関係の肯定的側面，QN＝対人関係の否定的側面，JU＝充実感，DP＝抑うつ
安心さがしは，Time 1が意図，Time 2が行動
n＝71～75（欠損値のため，各相関関係の n が若干異なっている）
†$p<.10$，*$p<.05$，**$p<.01$

反映的自己評価，抑うつを投入，統制し，Step 2 に自尊心，安心さがしを主効果として投入し，Step 3 に交互作用項を投入した。各 Step の R^2の増分の有意性を検定し，有意な増分を示した Step については β 係数を解釈した。結果を Table 3 に示した。これを見ると，自尊心の主効果が有意であり，自尊心が高いほど，反映的自己評価が高くなることが示された。逆に言えば，自尊心が低いほど，反映的自己評価が低くなると解釈できる。

また，交互作用項が有意な傾向を示した。Aiken & West（1991）にしたがって，単回帰分析によって下位検定を行った。結果を Figure 1 に示した。低自尊心群の単回帰直線のみ傾きが有意な傾向を示した（β=-.27，p<.06）。すなわち，低自尊心者が安心さがしを行うほど，反映的自己評価が下がることが示された。それに対して，高自尊心者は安心さがしをしてもしなくても，反映的自己評価は高いまま維持されていた。この結果は予測と一致するものであった。

さらに，他者からの拒絶認知の別の指標として，対人関係の肯定性と否定性を基準変数とした同様の分析を行った。しかしながら，Table 3 に示されたとおり，いずれも有意な交互作用は示されなかった。

安心さがしを行うことによって，他者から拒絶され，その結果適応が悪化するかどうかを検討するために，Time 2 の適応変数を基準変数として同様の分析を行った。Table 3 の結果から，Time 1 の自尊心が高いほど，Time 2 の充実感が高まり，抑うつ傾向が低下することが示された。また，Time 1 の安心さがし傾向が高いほど，Time 2 の抑うつが下がる傾向が示された。これは予測と一致しない結果であった。これらの変数間の単純相関（Table 1）をみると，有意ではないものの正の相関関係にあることが示されており，多重共線性の影響も考えられる。自尊心と安心さがしの交互作用は，充実感，抑うついずれの変数に対しても見いだされなかった。

Table 3 Time 2の拒絶認知と適応に対する自尊心と安心さがしの効果

	RG	QP	QN	JU	DP
Step 1					
Time 1の基準変数（β）	0.63 **	0.80 **	0.75 **	0.36 **	-
Time 1の抑うつ（β）	0.07	0.00	-0.04	-0.24 †	0.68 **
Step 2					
Time 1の自尊心（β）	0.38 **	0.12	-0.09	0.29 *	-0.23 *
Time 1の安心さがし（β）	-0.11	-0.01	0.17 †	-0.13	-0.16 †
Step 3					
自尊心×安心さがし（β）	0.16 †	0.03	0.02	0.15	-0.13
Step 1の ΔR^2	0.35 **	0.64 **	0.55 **	0.29 **	0.47 **
Step 2の ΔR^2	0.08 **	0.01	0.03	0.07 *	0.05 *
Step 3の ΔR^2	0.02 †	0.00	0.00	0.02	0.02

†p<.10，*p<.05，**p<.01

Note. RG＝反映的自己評価，QP＝対人関係の肯定的側面，QN＝対人関係の否定的側面，JU＝充実感，DP＝抑うつ

β 係数は各 Step での値を示している

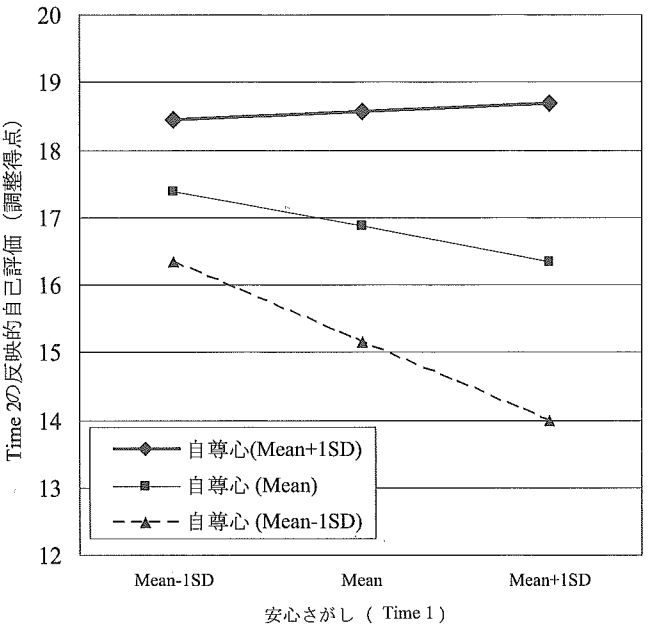

Figure 1.　Time 1の自尊心と安心さがしが Time 2の反映的自己評価に及ぼす影響

安心さがしの生起過程に関する検討

Joiner, et al.（1999）の知見に基づき，安心さがしの規定因の検討を行った。まず，自尊心および反映的自己評価の変化量を，Time 2 の得点から Time 1 の得点を引いて算出した。そして，それらの変化量得点と Time 1 の 2 つのライフイベント得点（大学生活因子と孤立因子）との単純相関を算出したところ，いずれも関連がみられなかった（r=-.01〜.12, *n.s.*）。さらに，2 つのライフイベントが自尊心の変化量を規定し，それが Time 2 の安心さがしを生起させ，さらに反映的自己評価の変化量を規定するモデルをパス解析によって分析した。しかしながら，いずれのパス係数も有意な関連を示さなかった。

次に，自尊心と反映的自己評価を変化量ではなく，Time 1 と Time 2 の得点を用いたモデルを用いてパス解析を行った。結果を Figure 2 に示す。適合性指標は高い値を示した（GFI=1.00, $AGFI$=.996, CFI=1.00, x^2=.035, p=.851）。図中，太線は 1 %または 5 %水準で有意なパスを示し，細線は10%水準で有意な傾向のパスを示し，波線は有意でないパスを表している。図より，まず Time 1 のライフイベントから Time 1 の自尊心と反映的自己評価へのパスが有意あるいは有意な傾向の負の関連を示していることが分かる。ライフイベントを多く経験した結果，自尊心が低下し，さらに親密な友人からどう思われているかという反映的自己評価も低下することが示唆される。また，Time 1 の安心さがし（意図）は，大学生活に関するライフイベントから直接規定されるだけでなく，2 つのライフイベントによって低下された Time 1 の自尊心を仲介して，間接的に規定されることが示された。ネガティブなライフイベントを多く経験するほど，自尊心が下がり，その結果，自己価値が不安定になり，親密な同性に対して安心さがしをしようという意図が高まることが示唆

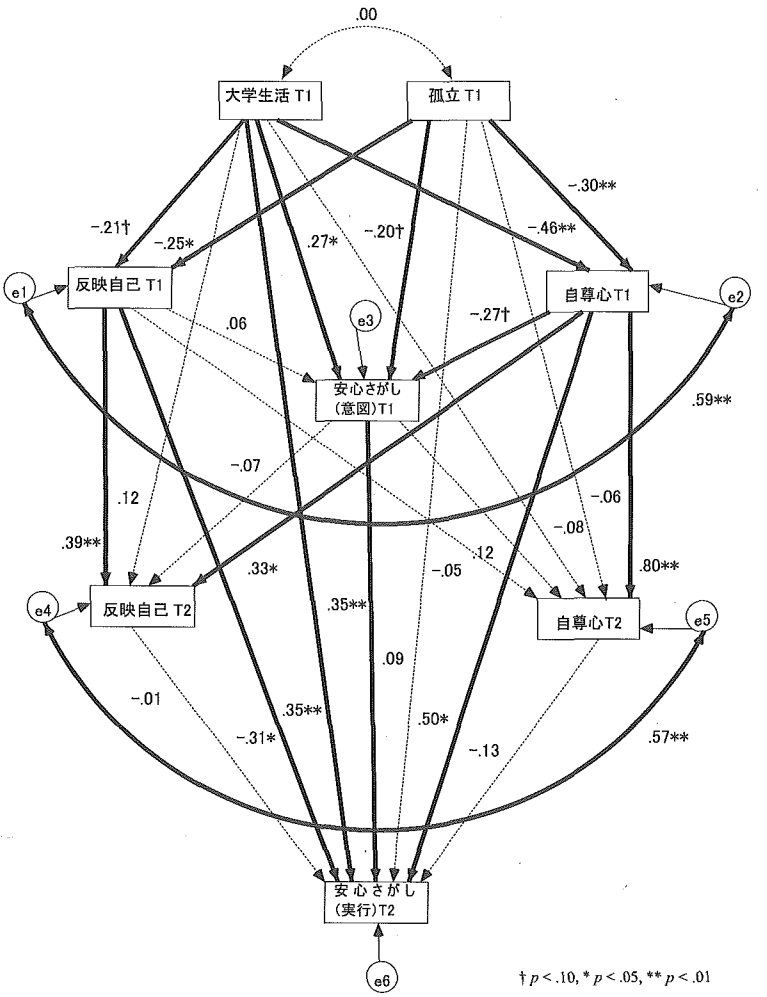

Figure 2. 安心さがしの生起過程に関するパス解析結果
※数値は，標準化係数

される。この結果はJoiner, et al.（1999）で示されたライフイベントが自尊心を下げ，安心さがしを生起させるというプロセスと一致する。ただし，この結果はTime 1の変数間の関連であるために，逆の因果関係を想定することも可能であるため，慎重に解釈を行う必要がある。

続いて，Time 2の安心さがしがどのように規定されているかを見てみる。まず，Time 1の大学生活に関するライフイベントが直接的にTime 2の安心さがしに影響を与えていた。大学生活に関するネガティブなライフイベントを経験するほど，安心さがしを行うことが示唆される。また，ライフイベントによって低下されたTime 1の反映的自己評価から，Time 2の安心さがしへの負のパスが有意であった。親密な同性の友人から肯定的に評価されているだろうという認知が低下すると，拒絶されたかもしれないと不安になり，安心さがしが行われることが示唆される。また，Time 1の安心さがし（意図）からTime 2の安心

さがし（実行）への正のパスも有意な関連を示した。上述の結果と併せて解釈すれば，ライフイベントにより自尊心が低下し，安心さがしを行おうという意図が高まり，その結果，安心さがしが実際に行われるという過程が示唆される。最後に，Time 1 の自尊心から Time 2 の安心さがし（実行）へのパスが正の影響を示した。これは予測と一致しない結果である。自尊心の高い人が安心さがしを実行できると解釈される。多重共線性の可能性も含め，今度，詳細に検討されるべきプロセスである。

ま と め

本研究の結果，低自尊心者においても，抑うつ者と同様に下方螺旋過程の存在が示唆された。Figure 1 に示されたように，低自尊心者が安心さがしをするほど，親密な友人から肯定的に評価されているという反映的自己評価が低下した。逆にいえば，親密な友人から拒絶されているかもしれないという認知が高まったと解釈できる。ここで重要なのは，低自尊心者自身が他者から拒絶されたと認知できていることが示唆される点である。抑うつ者の安心さがしに関する先行研究では，ペア調査によって，実際に他者から拒絶されることが示されていた（Joiner and Metalsky, 1995）。この結果と本研究の結果をあわせて考えるならば，低自尊心者は安心さがしを過度に行うことによって，親密な友人から拒絶され，それを認知するという過程が存在すると考えられる。今後，ペア調査を行い，この過程が実際に存在するかについて検討していく必要がある。

また，本研究では，安心さがしの生起過程を検討した。その結果，ネガティブなライフイベントを経験することによって，自尊心が下がり，それによって，親密な友人に対して安心さがしをしようという意図が高まり，そして，実際に安心さがしを行うというプロセスが見いだされた。この結果は，Joiner, et al.（1999）で示された，安心さがしの生起プロセスをより詳細に示したものである。すなわち，安心さがしに関する意図から実行という個人の認知プロセスを実証した結果であるといえる。ただし，Time 1 の自尊心が高いほど，安心さがしを頻繁に行うという，予測と一致しない，自尊心から安心さがし（実行）への直接パスも見られ，今後より詳細な検討が望まれる。

本研究において見いだされた知見でさらに重要な点として挙げられるのは，反映的自己評価の機能である。本研究の問題で述べたように，反映的自己評価は低自尊心者が採る安心さがしの結果生じる他者からの拒絶認知として扱われていた。Table 3 および Figure 1 に示された検討結果では，低自尊心者が安心さがしを行うことによって，反映的自己評価が低下するという過程が示された。このプロセスでは反映的自己評価は低自尊心者が安心さがしを行ったために生じる結果変数としての側面が見いだされていた。しかしながら，Figure 3 に示されたパス解析の結果では，Time 1 の反映的自己評価は Time 2 の安心さがし（実行）を規定する要因として機能することが示された。すなわち，反映的自己評価が低いほど，安心さがしを行うという結果が見いだされたのである。親密な同性の友人から評価されていないと思うほど，なぜ評価されないのかという疑念が生じ，安心さがしを生起させると考えられる。これらの知見から考えると，反映的自己評価は安心さがしを生じさせるだけでなく，実際に安心さがしを行った結果，他者から拒絶された認知にもなるという複合的な役割を担っ

ていることが示唆される。このことは，下方螺旋過程が，低自尊心者が安心さがしを行い，親密な友人や恋人から拒絶され，それによって低い自尊心を維持するといった循環的なプロセスであることからも了解できる。反映的自己評価は，このような下方螺旋過程を循環させている鍵変数である可能性が考えられる。

最後に，本研究の問題点と今後の課題について述べる。まず，本研究で Time 2 に測定した安心さがしの実行尺度の平均値が低かったという点が問題点として挙げられる。このことは，人々が実際には安心さがしをほとんどしないことを示しているとも考えられるが，そうではなく人々が行っている安心さがしをこの尺度では十分に捉え切れていないとも考えられる。今後，安心さがしに関する尺度を改善させる必要がある。

また，低自尊心者の下方螺旋過程について，本研究では捉えきれなかったのは，他者からの実際の拒絶である。今後，ペア調査やペアでの実験室実験などによって，他者からの実際の拒絶を測定し，低自尊心者の下方螺旋過程の全容について明らかにしていく必要がある。

Appendix. 安心さがし尺度（意図）の項目

1．相手が自分のことを本当に理解していないと思い，相手の気持ちを聞く
2．相手を怒らせて，相手が自分のことを真剣に考えてくれるかを確かめる
3．自分のことを相手が見放したかと思い，評価の真意について相手に聞く
4．自分のことを心から気づかってくれているかどうか，相手に確かめる
5．相手が自分のことを認めてくれているかどうかを，直接聞いてみる
6．相手の気を引いて，自分のことを気にかけてくれているかを確かめる
7．相手を批判して，それでも友達でいてくれるかどうかを確認する
8．自分のことを本当に思ってくれているどうか，相手にそれとなく尋ねる
9．相手の真意を第3者に聞くことで，確かめようとする

Note. Time 2では語尾を「聞いた」等の過去形に修正し，
過去2ヶ月間に安心さがしをどのくらい行ったかを測定した。

註

1） 抑うつが高く，かつ自尊心の高い人というのは概念的には存在しうるが，抑うつと自尊心との相関が高いため，実際にはこのような人は少数しか存在しないと考えられる。したがって，Joiner, et al.（1992）の検討は概念的には了解可能であるが，分析モデルとしては不適切であり，このような問題点を考慮した上で解釈すべき結果である。

引用文献

Aiken, L. S. & West, S. G. (1991). *Multiple Regression : Testing and Interpreting Interactions.* Thousand Oaks, CA : Sage.

Baron, R. M., & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research : Conceptual, strategic and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology,* **51**, 1173-1182.

Coyne, J. C. (1976). Toward an interactional description of depression. *Psychiatry,* **39**, 28-40.

Benazon, N. R. (2000). Predicting negative spousal attitudes toward depressed persons : A test of Coyne's interpersonal model. *Journal of Abnormal Psychology,* **109**, 550-554.

Joiner, T. E., Jr., & Metalsky, G. I. (1995). A prospective test of an integrative interpersonal theory of depression : A naturalistic study of college roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 778-788.

Katz, J., Beach, S. R. H., & Joiner, T. E., Jr. (1998). When does partner devaluation predict emotional distress? Prospective moderating effects of reassurance-seeking and self-esteem. *Personal Relationships,* **5**, 409-421.

Joiner, T. E., Jr., Alfano, M. S., & Metalsky, G. I. (1992). When depression breeds contempt : Reassurance-seeking, self-esteem, and rejection of depressed college students by their roommates. *Journal of Abnormal Psychology,* **101**, 165-173.

Joiner, T. E., J. Katz, and A. Lew (1999) : Harbingers of Depressotypic Reassurance Seeking : Negative Life Events, Increased Anxiety, and Decreased Self-Esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 630-637.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* Princeton, NJ : Princeton University Press.

大野　久（1984）．現代青年の充実感に関する一研究―現代青年の心情モデルについての検討―　教育心理学研究，**32**，100-109．

尾関友佳子（1990）．大学生のストレス自己評価尺度―質問紙構成と質問紙短縮について―　久留米大学大学院紀要比較文化研究，**1**，9-32．

Pierce, G. R., Sarason, I. G., & Sarason, B. R. 1991 General and Relationship-Based Perceptions of Social Support : Are Two Constructs Better Than One? *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 1028-1039.

坂野雄二・嶋田洋徳・久保義郎・深代和信（1994）．大学生のライフストレス評価と社会不安の関連　ヒューマンサイエンス，**7**，27-35．

鈴木庄亮・青木繁伸・柳井晴夫（1989）．THI ハンドブック―東大式自記健康調査の進め方　篠原出版

浦　光博・高野優子　1995　対人関係と肯定的側面と否定的側面との関連の分析　日本社会心理学会第36回大会発表論文集，308-311．

Wood, J. V. & Lockwood, P. (1999) Social Comparisons in Dysphoric and Low Self-Esteem People. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds) *The social psychology of emotinal and behavioral problems : Interface of social and clinical psychology,* Washinton, DC : American Psychological Associoation. Pp.97-136.（安藤清志・丹野義彦（監訳）　臨床社会心理学の進歩　―実りあるインターフェースをめざして―　北大路書房）

山本真理子・松井　豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30，64-68．

（2007年11月20日受理）